

# 機関研究のアウトリーチ —みんなくワールドシネマの試み

文 鈴木 紀

すずき もと

先端人類学研究部准教授。専門は開発人類学、ラテンアメリカ文化論。主な著書に『ラテンアメリカ』（共編著 朝倉書店 2007年）、論文に『開発人類学の展開』（『開発援助と人類学』明石書店 2011年）、『プロジェクトからいかに学ぶか：民族誌による教訓抽出』（『国際開発研究』17(2) 2008年）など。

## 映像に描かれる「包摂と自律」

「すべての事について、“包摂と自律”の視点で見るヒントを、映画鑑賞を通じて知りました。」（第15回みんなくワールドシネマ、アンケートより）

国立民族学博物館ではさまざまな映画会を実施している。その1つがみんなくワールドシネマである。民博の機関研究「包摂と自律の人間学」をアウトリーチすることを目的に、2009年9月から2012年7月までに16本の映画を上映した。

アウトリーチとは、博物館や大学など公共的な研究機関が、一般向けに研究の成果や面白さを説明することである。ところが「包摂と自律」は日常語ではないため、その意味をわかりやすく伝えるには工夫が必要だった。そこで着目したのが映画である。映画を鑑賞しながら、「包摂と自律」の問題意識が学べる企画を考案した。みんなくワールドシネマ実行委員長の小長谷有紀は、次のように説明する。

世界各地では「包摂と自律」が求められる状況が日々の暮らしのもとで日本以上に進行しており、その問題点をすくなく描いた映画が多い。なかでも芸術的に素晴らしい作品は、おおいなる感動をもたらすから、私たちは感性を動員させて問題を考えることができる。言い換えれば、共感とともに情報を得ることができるのである。（小長谷 2010：7）

本稿では、みんなくワールドシネマのこれまでの歩みを振り返りながら、1) なぜ、どのような映画を選んだか、2) 参加者はどう反応したか、3) 研究にどのようなフィードバックがあったか、4) 今後、みんなくワールドシネマをどのように進めていくべきか、について述べてい。なお筆者は、機関研究「包摂と自律の人間学」領域に属する「支援の人類学：グローバルな互惠性の構築に向けて」の研究代表である（鈴木 2010；2012 参照）。ま

た映画ファンでもあるため、みんなくワールドシネマ実行委員となり、映画の選定、チラシと配布資料の作成に携わってきた。映画会の司会も8回担当している。本稿はそうした筆者の経験に基づく個人的な見解である。

## 映画の選定

「包摂と自律」に関する映画を選ぶには、第1に学術用語である「包摂と自律」を日常語に翻訳すること、第2にその言葉にふさわしいストーリーをもつ映画を探すことが必要である。

包摂とは、正確には社会的包摂（social inclusion）のことであり、社会的排除（social exclusion）と対をなす概念である。社会的排除とは、欧州先進諸国において1980年代以降に発生した新しい社会問題に対して用いられた言葉で、その意味は「経済と福祉国家の危機のなかで、長期失業、不安定就労、若年者雇用問題、家族の変化、ホームレス生活者や移民の増大、そしてこれらに伴う貧困」とされる（福原 2007：11）。社会的包摂はこれに対する政策の総称であり、通常は就労支援、所得保障、シティズンシップの保障、個別の支援サービスの提供などの施策を含む（福原 2007：29）。

民博の機関研究は、こうした社会的排除／包摂に関する研究に対して、2つの刷新を試みている。第1に、包摂と自律を一組の概念として提示したことである。包摂は政策課題として登場した概念であるため、包摂を巡る議論は、包摂する側、すなわち統治者側の視点を反映したものになりやすい。これに対し包摂される側から、包摂の過程を批判的にとらえるために用意した概念が自律である。自律とは、包摂される者たち自身が問題解決の主体となることを意味する。包摂と自律を併置することで、包摂される者のエイジェンシーに着目しながら、包摂の実態を明らかにできるだろう。第2に包摂と自律

年度	回数	日	映画タイトル	監督	制作年	制作国	映画解説
2009	1	9月26日	グラントリノ	クリント・イーストウッド	2008	アメリカ	柴崎友香、乾美紀
	2	10月31日	そして私たちは愛に帰る	ファティ・アキン	2007	ドイツ・トルコ	森明子
	3	1月30日	オフサイド・ガールズ	ジャファル・バナヒ	2006	イラン	山中由里子
	4	2月27日	トルバン	セルゲイ・ドヴォルツェヴォイ	2008	カザフスタン・ドイツ・ロシア・ポーランド	小長谷有紀
2010	5	5月22日	シリアの花嫁	エラン・リクリス	2004	イスラエル・フランス・ドイツ	錦田愛子、陳天璽
	6	7月24日	わが故郷の歌	バフマン・ゴバディ	2002	イラン	柘植元一、福岡正太
	7	11月3日	トゥルー・ヌーン イワノビッチの村	ノシール・サイドフ	2009	タジキスタン	島田志津夫、陳天璽
	8	1月22日	タレントタイム	ヤスミン・アフマド	2008	マレーシア	信田敏宏、戸加里康子
	9	2月26日	あなたなしでは生きていけない	戴立忍 (レオン・ダイ)	2009	台湾	野林厚志、月田みづえ
2011	10	5月28日	海を飛ぶ夢	アレハンドロ・アメナーバル	2004	スペイン・フランス・イタリア	小林昌廣
	11	7月29日	裸足の1500マイル	フィリップ・ノイス	2002	オーストラリア	久保正敏
	12	8月21日	サムソンとデリラ	ワーウィック・ソーントン	2009	オーストラリア	飯嶋秀治
	13	1月14日	今夜、列車は走る	ニコラス・トゥオッツォ	2004	アルゼンチン	松下洋
	14	2月19日	バチャママの贈りもの	松下俊文	2009	日本・アメリカ・ボリビア	関雄二
2012	15	5月12日	僕たちは世界を変えることができない。 But, we wanna build a school in Cambodia.	深作健太	2011	日本	佐藤寛、秋保さやか
	16	7月14日	路上のソリスト	ジョー・ライト	2009	アメリカ	佐野章二

を、1980年代以降の西欧の政策論の文脈から解放した点である。これは時間、空間的に多様な諸民族の文化を研究する文化人類学の関心を反映したものであり、包摂と自律という枠組みを用いて、文化研究をおこなう方法を開拓することをねらっている。たとえば民族的なマジョリティとマイノリティの関係性、とりわけ後者が前者によっていかに排除されるかという問題と、その問題がどう克服されるかという問題を考えるために、包摂と自律の概念を活用するのである。

それでは、包摂と自律を、どのような日常語に翻訳したのだろうか。みんなくワールドシネマのチラシに着目してみよう。

初年度のチラシは、包摂と自律について次のように記述した。「多様な文化的背景をもつ人びとと共生を実現していくために、どのような社会を築いていけばよいのでしょうか。新しい機関研究『包摂と自律の人間学』では、人びとの違いを承認し＝＜包摂＞し、移民や難民に限らず、無国籍者、障害者、失業者など社会的に弱い立場にある人びとが自分らしさを生かすこと＝＜自律＞のできる公正で平等な社会を実現する方策について考察します。」このように、包摂は「差異の承認」、自律は「自分らしさを生かす」と言い換え、包摂と自律を多文化共生実現のための条件として提示している。これに呼応し、上映した4本の映画は、アメリカ人とラオス人（第1回）、ドイツ人とトルコ人（第2回）、イランの男性と女性（第3回）、カザフスタンの伝統的遊牧民と新参者（第4回）といった、異質な者同士の共生を描く作品である。

2010年度からは、チラシに年間テーマを掲載するよう

になった。2010年度のそれは「国境と民族を超えて」である。このテーマが示唆するのは、国境や国籍、民族の差が社会的排除を増幅するという認識である。上映作品は5本で、最初の3本はまさに国境の物語である。それぞれ、イスラエル占領地とシリアの境界線に翻弄されるドゥルーズの人びと（第5回）、イランとイラク国境をさまようクルドの人びと（第6回）、突然閉鎖されたウズベキスタンとの国境に戸惑うタジクの人びと（第7回）の苦悩を伝える作品である。第8回は、マレーシア内部の「見えない国境」としての民族差をあつかった作品、第9回は、無戸籍の娘を抱え、社会の底辺へと排除されていく台湾の客家男性の物語である。

2011年度のテーマは「家族から社会を見る」である。この年度から筆者がチラシの解説文を担当することになった。包摂と自律とは、「社会の中で一人ひとりの存在が認知され、かつ尊重されることを意味します。だれもが自分らしく生きるためには、仲間はずれにされることなく、さりとて誰かのいいなりになるのでもない、適切なバランスが求められます」と説明した。これは、包摂と自律が公共政策と個人の意志との間のある種の均衡状態として成立するという考えに基づく。家族に焦点をあてたのは、包摂と自律をめぐる葛藤はプライベートな空間で顕在化しやすいと想定したためである。この方針に則り、第10回は安楽死を遂げる男性を描いたスペイン映画を取り上げた。第11回と12回はオーストラリア・アボリジニーを描いた映画である。前者は1930年代、後者は現代と時代設定が異なるが、各時代における先住民政策が、アボリジニーの家族に及ぼす影響を比較することができた。第13回は民営化政策によって解雇され

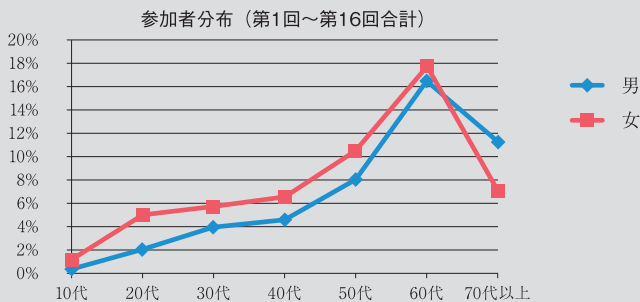
たアルゼンチンの鉄道員たちの物語、第14回はボリビアの先住民族の少年が、変わりゆく社会の中で成長していく様子をとらえた作品である。

本年度のテーマは「支援と絆」である。チラシでは「包摂とは、自分では解決できない困難を抱えている人に対して、他の人や社会全体が支援の手をさしのべることを意味します。自律とは、支援を受けた人が少しずつ自信をつけ、やがて自分でその問題に向きあえるようになることを意味します」と表現し、包摂と自律が何らかの支援行為を媒介に成立することを強調した。7月までに2回の映画会が開催され、第15回は、カンボジアに小学校を建てようと奔走する日本の大学生を描いた作品、第16回は、ロサンゼルスのレストランに暮らす音楽家と彼を社会復帰させようと試みるジャーナリストの交流を描いた作品を上映した。

### 参加者の反応

初回から16回までの参加者総数は5779人に上り、1回あたりの平均は361人である。年度による増減はあまりなく、当初より現在まで、一定の人気を保っているといえる。

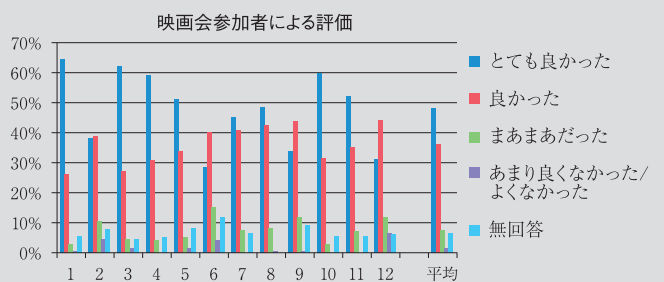
上映後に実施しているアンケートの結果を見てみよう。参加者の男女比は、男性が46%、女性が56%で、女性が男性よりも多い。年齢分布では60代が最多で、50代以上の男女が全体の7割を占める。みんなくワールド



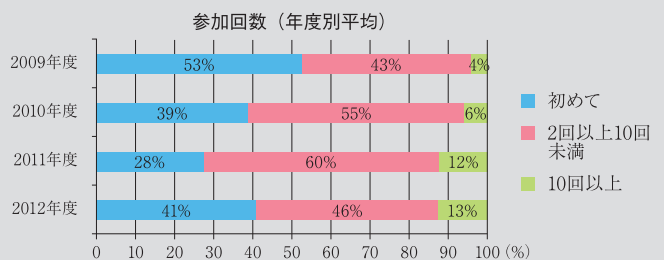
出典：みんなくワールドシネマのアンケートを基に著者が作成。

シネマはこうしたシニア世代に好評を博していることがわかる。

第1回から12回までは、映画会の満足度を尋ねていた。平均すると「とてもよかった」48%、「よかった」36%、「まあまあだった」8%、「あまりよくなかった／よくなかった」2%、および無回答が6%となっており、参加者の大半が満足していることがわかる。一方、映画会ごとに見ていくと、多少のばらつきが認められる。「とてもよかった」の比率が60%を超えたのは、第1回、第3回、第10回である。第1回の映画は、いわゆるハリウッド映画で娯楽性が強いこと、第3回は、女性にサッカー観戦を禁じるイランの状況に、日本人としては驚愕を禁じえないこと、第10回は、寝たきり病人の家族介護とその結末としての安楽死という物語の筋書きが、多くの中高年層の参加者にとって他人事ではなかったことが、好評の理由だろう。逆に「まあまあだった」と「よくなかった」の合計が15%を超えたのは、第2回、第6



出典：みんなくワールドシネマのアンケートを基に著者が作成。



出典：みんなくワールドシネマのアンケートを基に著者が作成。注）みんなくワールドシネマ以外の、みんなく映画会への参加回数を含む可能性がある。



みんなくワールドシネマ第5回  
「シリアの花嫁」 チラシ



みんなくワールドシネマ第13回  
「今夜、列車は走る」 チラシ

回、第12回である。これらの映画は物語の展開がやや複雑で、映画のキャラクターに感情移入がし

にくかったからかもしれない。とくに第12回は、主演の俳優が一言もしゃべらないという特異な演出の映画であり、難解と感じた人もいただろう。

高い満足度を反映してリピーターも増えている。「初めて」「2回から10回未満」「10回以上」の比率を年度ごとに見てみよう。最初の3年間は徐々に初参加の比率が減り、リピーターが増加していることがわかる。また10回以上の参加者が着実に増加し、みんなくワールドシネマの熱心なファンが形成されつつあることがうかがえる。一方、2012年度は2回分だけの集計であるが、一気に初参加者の比率が増大した。新たなファンを獲得できたようだ。

アンケートでは、この他、映画会に関する感想を尋ねている。映画や企画に対する肯定的な意見が多く、今後見たい映画や、取り上げてほしいテーマの提案もある。しかし中には、批判的な意見も寄せられる。司会の話が冗長だとか、司会とゲストとの対談がつまらないといった手厳しいコメントを読むたび、筆者は身のすくむ思いがする。何度企画に携わっても、毎回、勉強の連続である。

### 映画から学べること

みんなくワールドシネマで上映するのは、劇場公開を目的に制作された劇映画である。このような映画から人類学者は何を学ぶことができるのだろうか。

アメリカ人の人類学者サットンとウォーゲンは、ハリウッドのヒット作など人気映画を対象とする人類学的研究を提唱している (Sutton and Wogen 2009)。人類学者

にとって、この種の映画の一番の問題点は、映画自体が作家や監督によるフィクションであり、その

映像に特定の文化の生の姿を見いだすことは困難だということであろう。映画鑑賞はフィールドワークにはならないのだ。そこでサットンらは、劇映画を恣意的な現実描写とみなすよりも神話とみなすことを提案する。神話としての映画は「当該文化における重要な矛盾を探究する。映画の魅力はこれらの文化的矛盾を何度も考えさせる力にある」という (Sutton and Wogen 2009: 16)。ここでは、この提案を受け、筆者がみんなくワールドシネマの映画を見て気づかされた包摂と自律のプロセスにおける2つの問題を指摘したい。それらは、包摂と自律に関する政策論的研究では、あまりにも個人的な問題として考慮されないことである。しかし民族誌的探究にとっては、重要な着眼点となる問題である。

<排除の怨嗟と自律の希望>社会政策としての包摂論の前提には、社会的に排除された人を公共政策によって包摂し、自律を促すというシナリオが存在する。しかし、一旦社会から排除された者は、容易にその事実を受け入れて、前向きな行動がとれるものだろうか。こうした疑問を喚起させ、その難しさを示唆する映画が、第13回に上映した「今夜、列車は走る」である。先述したように、これは経営合理化のために解雇されたアルゼンチンの鉄道員たちの話である。リストラによる失業という、いわば典型的な社会的排除を題材にしている。物語は、5人の鉄道員の解雇後の暮らしをたどる形で進行する。タクシー運転手となったアティリオは、客に騙されたり、親方に売り上げをピンハネされるなど辛酸を嘗める。幼い子供をかかえるダニエルは、妻には内緒で銃

の訓練を受け、スーパーマーケットのガードマンとして命を張る職を得る。この2人は戸惑いながらも積極的に自律を求めた人物とみなすことができる。一方で、鉄道員としての誇りを守るため、ブラウリオは自主退職届けに署名せず、補償金の受給も拒否する。そして鉄道の修理工場に立てこもり、持病のためそこで死を迎える。安定した職を得られないゴメスは、自暴自棄になり、スーパーマーケットに強盗に入る。この2人は排除されたことへの怨嗟を引きずり、自律にむけて踏み出せなかった人物といえるだろう。興味深いのは5人目のカルロスである。彼は転職の努力はするが、何をすべきか決心がつかない。さりとてゴメスのように社会に弓を引くこともできない。その焦燥感からか家にこもり、漏水の修理を口実に浴室を破壊しつづける。

映画では5人の行動を、各人各様の生き様として描いているが、筆者はこれらを、排除から包摂、そして自律へといたるプロセスにおいて人びとが経験しうる感情を類型化したものだと考えてみたい。とくに映画の最後で強盗とガードマンとして対峙するゴメスとダニエルは、同一の人間の中に生じる排除の怨嗟と自律の希望という矛盾する感情の葛藤を象徴しているように思える。

＜支援の利他性と利己性＞包摂と自律を促す支援とは、公的なものばかりではない。私的な支援が公的な支援を補完し、新しい公共性を創出するという期待もある（今田 2000：26）。それでは私的な支援をおこなう者の動機は何だろうか。

第15回「僕たちは世界を変えることができない。But, we wanna build a school in Cambodia」と第16回「路上のソリスト」で描かれるのは、支援者のエイジェンシーである。第15回の映画は、カンボジアに小学校を建てるための資金集めに没頭する大学生、甲太の物語である。退屈な日常に刺激が欲しいという不純な動機で始めた活動だが、仲間割れや、失恋、学業不振など、彼は何度も困難に直面する。なかでもカンボジアに視察にでかけ、取り組んでいる問題の大きさと、それに対する自分の無力さを知ったことは、彼にとって最大の試練だっただろう。しかしそれは同時に甲太にとって最大の収穫であり、それ以後、彼は迷いを捨てて、カンボジアの人びとのために自分ができることに集中するようになる。映画の題名は、そうした甲太の覚醒を表現したものである。

第16回は、ホームレスの音楽家ナサニエルと、彼の社会復帰を支援する新聞記者ロペスの物語である。コラムの話題探しをしていたロペスは、ナサニエルに関心をもつ。やがて彼の記事は読者の反響を呼び、続編を書くためにロペスはますますナサニエルへの関与を深めていく。ナサニエルにチェロを贈ったり、アパートを借りてレッスンの場を提供したり、彼の支援は一見順調だった。しかし束縛を恐れるナサニエルは結局ストリートに戻ってしまい、ロペスは途方に暮れる。紆余曲折を経て結果的にロペスはナサニエルへの支援活動から多くのものを得る。ジャーナリストとしての名声や妻との復縁もその一部だが、もっとも貴重なのは、支援者ではなく友人として、ナサニエルの気持ちを尊重できる適切な距離感を学んだことだろう。この映画の見所は、支援されるナサニエルの変化よりも支援するロペスの変化にある。

両映画から明らかなのは、私的な支援の動機づけとして、利他的関心よりも利己的関心が重要だという点である。ところが一般に支援は、無私や無償という言葉とと



第16回みんなくワールドシネマ。映画会終了後も、講堂の外で解説者の佐野章二氏（中央の黒い服）と参加者の談話が続いた。（2012年7月14日 国立民族学博物館提供）

もに語られることが多い。そのため「自分のための支援」といえば、相手の事情を考えない、眉唾ものの支援という意味になるだろう。つまり私たちの支援観は、利他性だけを評価し、利己性を抑圧したものと言えないだろうか。私的な支援を活発化させるためには、支援の利己性を正当に評価することが必要だ。ただし、支援を通じて当初の利己的な関心がそのまま満たされるものでないことも、2つの映画から明らかだ。支援者が得られる最大の報酬は、利己的な関心が支援活動を通じて相対化された後に芽生える新しい自己認識ではないだろうか。

## 今後の展望

機関研究のアウトリーチというみんぱくワールドシネマの目的は、おおむね達成できていると判断できる。多くの参加者は、包摂と自律という問題に関心を持ち、映画を見ながらそれについて考えることを楽しんでいるようだ。しかしみんぱくワールドシネマには課題も存在する。3点指摘しておこう。

第1に、機関研究としておこなわれる学術的な活動と、みんぱくワールドシネマがかならずしも十分に連携していない点である。両方の企画を同時期に開催するためには、かなり早くから準備を始める必要がある、それがほとんど実現できていない。しかし例外もあった。第9回では、映画会の翌日に国際シンポジウム「世界における無国籍者の人権と支援：日本の課題」が実施されたため、映画を見た人がシンポジウムへも足を運ぶという流れが見られた。こうした試みが増えていくことが望ましい。

第2に、機関研究の内容と映画会を密接に関連づけるためには、年間テーマのもとにさまざまな地域、民族の映画を上映するという現在の運営方針を見直す必要がある。テーマをもっと特定し、それに関連する映画を短期集中的に特集することが有効だろう。たとえば「ラテン

系アメリカン・ドリームを求めて」というテーマを設定し、中南米からアメリカ合衆国への移民に焦点をあてた映画を上映するのである。その中には、出身国での社会的排除、移住者の旅、アメリカ社会における移民差別、および移民の抵抗や地位向上など、多様な作品を含めることができるだろう。こうして排除から包摂、自律へと至るプロセスを映画によって学ぶことが可能となる。

第3に、学術的なメッセージと映画会のエンターテイメント的性格をどのように両立させるかという課題である。現状は、後者に配慮し、劇映画のフィルムを日本語字幕付きで上映することを原則としている。この原則を緩和し、ドキュメンタリー映画、DVD上映、字幕なしもしくは英語字幕も可とすれば、前者の観点からは、より充実したプログラムを企画することができる。しかしその場合も、アウトリーチの趣旨に基づき、参加者への丁寧な解説や資料の作成が不可欠であることはいうまでもない。

最後にもう一人、みんぱくワールドシネマ参加者の言葉を引用して、本稿の結びとしよう。「映画の出来映えが素晴らしいだけでなく、みんぱくがテーマを掲げ、映画を通し世界の平和を目指そうとする取り組みに、敬意を表します。」

## 【参考文献】

- 福原宏幸 2007「社会的排除／包摂論の現在と展望」福原宏幸編『社会的排除／包摂と社会政策』pp.11-39 法律文化社。
- 今田高俊 2000「支援型の社会システムへ」支援基礎論研究会編『支援学』pp. 9-28 東方出版。
- 小長谷有紀 2010「包摂と自律の人間学—世界を共感する！—」『社会科のめざすもの』4: 7。
- Sutton, David and Peter Wogan (eds.) 2009. *Hollywood Blockbusters: The Anthropology of Popular Movies*. Oxford, UK: Berg.
- 鈴木 紀 2010「包摂とグローバルな互恵性」『民博通信』129: 8-9。  
—— 2012「『支援の人類学』の再提示：東日本大震災を経験して」『民博通信』136: 8-9。